

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：86101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720341

研究課題名(和文)「アワ船」による漁民移動と漁業移住の類型化に関する民俗学的研究

研究課題名(英文) Fishermen movement of "Awa-sen" and typification of fishery migration in folkloristics study

研究代表者

磯本 宏紀 (Isomoto, Hironori)

徳島県立博物館・その他部局等・その他

研究者番号：50372230

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円、(間接経費) 600,000円

研究成果の概要(和文)：「アワ船」とは、明治期から昭和期にかけて、徳島県南部から九州北部、五島列島へと漁業移住した船団および漁民のことを指して言う。「アワ船」による漁業移住は、日本を代表した遠洋漁業である以西底曳き網漁業の成立に大きく寄与した。この漁業移住について、現地調査および文献調査等にもとづき、民俗誌として記述した。

また、本研究において得られた調査データにもとづき、漁業移住について、漁民の移住地と出身地との相互関係を指標とした類型を提示した。

研究成果の概要(英文)："Awa-Sen" is a group of ships and fishermen who migrated from South Tokushima to North Kyushu and Goto Islands for fishery, since Meiji era to Showa era. Fishery migration of "Awa-Sen" greatly contributed to establishment of the Isei-Pair Trawl Fishery that was pelagic fishing on behalf Japan. I described in ethnography of this fishery migration, based on field research and literature research.

In addition, I showed a type for an index in mutual relations with the migration place and the hometown of fishermen, based on survey data in this study.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：漁民移動 漁業移住 伝播 「アワ船」 民俗学 以西底曳網漁業

1. 研究開始当初の背景

人の移動、物質的移動等の事象を、より具体的に捉えようとする試みは、民俗学等においても、近年になって若干見られるようになった。自治体史(誌)や調査報告書等においても、移住やそれに伴う伝播した事業が報告されるほか、実証研究にもとづいた理論の構築を試みた研究も提出されてきた。たとえば野地恒有『移住漁民の民俗学的研究』(吉川弘文館, 2001)では、漁民による出漁地側と移住地側の関係を双方向的に捉え、民俗学における技術伝播の研究に大きな示唆を与えた。また、小島孝夫編『海の民俗文化 漁撈習俗の伝播に関する実証的研究』(明石書店, 2005)においては、5人の研究者が個別のフィールドにおいて漁業や海村文化を対象とし、文化もしくは技術の伝播を検討するスタイルをとっている。結果的に多様な伝播の形態を抽出し、その上で伝播の概念設定と分析概念としての再定義を図っている。

また、移住そのものを生業研究の中で概念化する動きもある。松田睦彦「瀬戸内島嶼部の生業におけるタビの位置 愛媛県越智諸島の事例から」などがそれである。移住をそれ単独で成立するものではなく、「タビ」概念にもとづき、当事者の一連の生業活動の中に位置づけることができるものである。

研究を開始した2010年当時のこうした背景から、漁民移住研究においては、さらに個別事例研究を積み上げていく一方で、共通的分析概念をもって検討を始める段階に入ったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、漁業移住をもたらす生業構造や文化伝播の実態について明らかにするものである。さらに、「アワ船」の事例の実証的研究を軸とし、漁業移住の類型化を目指した研究である。

主な研究対象として、明治期から昭和期において、徳島県南部から九州地方へ出漁してきた「アワ船」と呼ばれた漁民集団に着目する。徳島県阿南市椿泊および同県美波町出身の延縄および底曳き網漁民集団である。近代漁法に依って九州地方から東シナ海へと出漁し、集住した経緯をもち、出漁地における文化の伝播にも関与した。

本研究においては、次の3点で研究を進展させる。第1に、近現代において、徳島県美波町日和佐、由岐等という隣接する地域から、2 艘曳き底曳き網漁業という機械化された漁法により出漁した漁民集団に関する新資料が獲得される点で意義がある。美波町漁民は、底曳き網船団での出稼ぎ・移住を、北部九州地方を母港にして繰り返してきた。自治体史等での概説的な記述のほか、こうした事例に関する体系だった研究はなく、基礎的な新資料の獲得は当該分野においても大きな進展となる。

第2に、伝播事例の検討を行い、他事例と

の比較にもとづく理論の抽出を目指す。これまで、伝播や伝承を分析指標とする研究の場合、個別事象の把握とその分析にとどまるものであった。本研究のような比較検討を行うとする研究は従来にないものであり、より普遍的で独創的なものと考えられる。

第3に、近現代社会における伝播事例、漁業交流事例を扱う点である。聞き取り調査等を絡めた伝播事例の把握は、情報伝達のツールや経路がより多様化、複雑化しており、明確な把握は困難である。しかし、漁業技術および漁具の伝播は専門特化したものである。したがって、近現代における継続的な伝播事例の調査としても意義がある。

そのほか、底曳き網漁業という近代漁法に依る出漁、移住を対象として扱うことから、近代漁法ないし現代の諸々の漁業問題に係る民俗学の側からの実態解明と、それにもとづく提言が可能である。一方、近現代における漁業出漁の経験者の高齢化も進んでいる。現時点において、直接的な聞き取りが可能な段階での調査は急務であり、この時期を逃すと今後困難になる。以上の点からも、社会的意義は大きい。

3. 研究の方法

本研究において、新資料の獲得のためにもっとも有効な方法は、対象者からの聞き取り調査である。これは扱う事象の性格によるもので、文字記録や画像記録等を残す可能性が低いためである。また、断片的に保存されている漁具、古写真等の画像資料についても資料とした。また、明治後期から昭和初期における新聞記事等や、漁業統計等は聞き取り調査による個別具体的な事例を全体像の中に位置づけることができる資料であり、資料として収集した。

なお、文献資料を活用して国内移住漁民に関するデータベース化を図り、漁業移住に関する類型化の基礎とした。

具体的には次の5つの方法により調査を行い、資料収集を行った。

1) 徳島県阿南市椿泊、同県美波町漁民の出漁地における現地調査

以下の地域を中心として現地での聞き取り調査、観察調査を行った。

福岡市、長崎市、佐世保市、五島市、下関市、佐賀県伊万里市等

2) 徳島県阿南市椿泊、同県美波町西由岐、日和佐地区における現地調査

調査地において聞き取り調査、観察調査及び関連民具、石造物(記念碑)絵馬等の調査を行った。

3) 雑誌、新聞記事、漁業史関係文書、古写真等文献資料、漁業日誌等の調査

上記1)2)での聞き取り調査により直接把握の可能な時代は、昭和初期ころまでであることが予想された。したがって、主として明治期以降の水産関係雑誌、新聞等の調査、その他雑誌等の調査を行い、第3者によって記

述された漁民集団に関する資料を蓄積した。
4) 博物館・資料館等所蔵漁撈具の調査
近代漁具については、多数の所蔵が確認できる。所蔵漁具についての調査を実施する。また、漁具調査は適宜1)の現地調査時にも行い、聞き取り調査とあわせて分析に要する数値データを蓄積した。

5) 国内を中心とする漁業移住の事例についても集積し、データベース化を図り、これにもとづき、漁業移住の類型化を検討した。

4. 研究成果

「アワ船」とは、明治期から昭和期にかけて、徳島県南部から九州北部、五島列島へと漁業移住した船団および漁民のことを指して言う。「アワ船」による漁業移住は、日本を代表した遠洋漁業である以西底曳き網漁業の成立に大きく寄与した。この漁業移住について、現地調査（フィールドワーク）および文献調査等にもとづき、民俗誌として記述した。また、本研究による調査により新たに獲得した資料（文献、写真等）は、研究代表者が所属する徳島県立博物館所蔵の民俗資料として、閲覧等が可能な状態で保管している。

研究対象とした「アワ船」と呼ばれた漁民集団は、明治中期から大正期に至るまで、出漁形態を変えながら、九州地方を中心に移動してきた。九州北部の根拠地を転々と移動していたが、やがて長崎県福江島玉之浦に根拠地を移し、さらには市場や出荷ルートが確保できる長崎、福岡、下関等の都市部へと移っていった。漁法も変化させた。その際、他地域から九州へ出漁してきた漁船団から、多面的な影響を受けた。また、徳島県南部の他地域から出漁した漁民の影響も受けた。そして、移住地においては、「以西底曳き網漁業」という日本を代表する遠洋漁業の中核を担った。漁民、漁船団が移動することは、単なる移動ではなく、出身地、移動先にも少なからず影響を与えていた。当初はそうした事象から生業構造、技術、文化の伝播を抽出しようと試みた。

ただ、調査研究を進めていくにあたり、「アワ船」の移動は単に生業構造、技術、文化の伝播をもたらすだけではなく、さまざまな局面において移動先で影響を受け、また影響を与え、ときには軋轢を生じながらも移動や移住を繰り返してきた。その関係は移動先と移住者という二局対立のものだけではなく、ときには他地域からの移住漁民をも巻き込んだ関係性があった。つまり、技術や文化等の伝播とは、漁民移動の結果によりもたらされたものの一部の状況を言い表しているにすぎず、この点に固執せず漁民移動そのものに対する幅広い検討の必要性を感じるようになった。

漁業移住した「アワ船」の人びとが、移動

先に何をもちたらし、何を残したのか、あるいはその地域から何を享受したのか（これらは技術や文化等の伝播を含むものであるが）、その関係性はどのようなものだったのか。移動先において、同様に移動してきた漁民らとどのような関係性を保持したのか。最終的に都市部に定住していったが、それはどういった時代背景があったのか。最終的には、そうした点に問題意識をもつようになった。

ただ、都市部に定住してもなお、出身地との関係性は保持されていた。船員の雇い入れであったり、出身地からの寄付金の普請であったり、しばらくの間、移住地と出身地との双方向的な関係が維持されていた。

調査地のうち、「アワ船」が移動し、移住していった地域の中には、すでに「アワ船」との関係が途絶え、その記憶すら薄れつつある五島列島の各地から、以西底曳き網漁業者が廃業した現在も、多くの「アワ船」関係者が居住する長崎市、福岡市のような地域など、地域によって大きなちがいがあつた。ただし、漁業移住という点から分析するならば、移入していく側からは何らかの目的や利益があつて移住してきた点では共通している。問題は、移入してきた漁民をどのように評価し、どのような関係性を築き、移住へと結びつけたかといった点である。この点で、時代ごと、地域ごとの対応に差があつた。

では、移住地側（受け入れ側）は「アワ船」などの底曳網船団による漁法が大きな利益をもたらすとわかっていたものの、その技術や漁法がその地域に伝播し、定着したかという「アワ船」の移入地の大部分においてはそうではなかつた。

受け入れ側は、たとえば次のような戦略を取つた。昭和初期から戦後直後にかけて、福江島玉之浦を一大根拠地としていた「アワ船」に対して、すでに大きな利益と雇用を生み出す底曳網船団を地元呼び込もうと、長崎市、福岡市、伊万里市などは港湾を整備し、招致合戦を展開した。当時の漁船団誘致の結果として、「アワ船」は移動することになった。新規に企業が入り、地域に雇用をもたらす、利益をあげて税金を納めるといふ、現在の企業招致の構造にも通じる側面がある。

以前研究代表者は、磯本（2012）において、瀬戸内沿岸域の潜水器漁業の事例をあげて機械化された近代技術の伝播が起こりうるという点を指摘した。しかし、この「アワ船」の事例の場合、技術伝播は起こりうる余地がなかつた。地元で他地域の漁民が大きな利益をあげている中で、どのような対応ができたのか、その技術をまねて自分たちのものにしたのかということ、それは不可能だった。その要因として、二艘曳き底曳き網漁業が許可漁業であり、統数に制限がかけられていた点

が一つにはあげられる。そして、もう一点は、大規模な資本を必要とする漁業であった点である。2隻1組で25人ほどが乗り組み70~90トンクラス(最終的には150トン級)の漁船で大型の網を使い、一度に大量の漁獲物を売りさばき、出荷する。昭和初期の二艘曳き底曳網へと変わっていく過程において、すでにこうした資本が保有する技術は、一地域の数少ない漁民の力ではとうてい模倣できないものになっていたのである。そこで、移住者を受け入れた側が取った戦略が先の招致だった。

こうした前提に立った上で、大規模資本の一角を担う「アワ船」が、移住地においてどのように受け入れられたのか、その反対に出身地との関係はどう維持されていたのか、その変遷から次のように分類した。

〔移住地〕

1) 移住地住民との散居別住期〔玉之浦集住以前〕：明治中期から大正初期

燃料、水、食糧等の補給を行い、一時的に上陸して仮住まいをしたり、水産物の水揚げをしたりしたが、定住者とはなりえず、短期間に根拠地を変えていった。また、移住先の住民と混住するのではなく、既存のムラから離れた場所に集住するケースがあった。

2) 移住地住民との混住期〔玉之浦集住時〕：大正期から昭和初期

「アワ船」が玉之浦に集住し、もともとの住民と混住を始めたのは大正元年頃である。玉之浦は、東シナ海の漁場にもっとも近い五島列島西端に位置する場所であり、漁業に有利だった。大正9年頃を境に、「アワ船」の多くが母船式延縄漁業から二艘曳き底曳き網漁業へと転換していった時期も、この玉之浦を根拠地としていた。二艘曳き底曳き網という出雲船団の新漁法が、九州北部においては数年で普及し、定着した。出漁漁民間における漁撈技術の伝播であった。ただ、こうした技術が五島列島など移住地で導入されるケースは稀であった。上五島や長崎等においては、地元漁業者や問屋に系譜をもつ者による底曳き網漁業が行われる例もあったが、3章で確認したとおり、他の、より小規模な漁業技術が地元で選択され、伝播し、定着していった。

一方で、「アワ船」は大正期の玉之浦の石造物から確認したとおり、大きな資金源をもち、多くの阿波から来た船員をかかえ、地元への資金提供をし、神社の鳥居や常夜灯の建立など、地域コミュニティの中心的、象徴的施設の整備にもかわり、西方寺には招魂碑が残される。当時の玉之浦のコミュニティにおいて、少なからず影響力を保持していたといえる。

3) 組織的漁業経営と企業化〔都市住民としての集住〕：昭和初期から平成初期

海産物の出荷に有利な都市部へと、昭和初

期から戦後直後にかけて移っていく。玉之浦からの移出に際し、玉之浦側は引き留めにかかり、長崎、福岡など移出地側は招致を行った。「アワ船」としての集住から、個々の水産会社として、親族経営の形態を維持した会社組織へと改変されていく。

地縁者、血縁者を船員として雇い入れていたが、高度経済成長期には出身地における就職先のトレンドの変化とともに、こうした船主、船員構造の連続性が崩れた。都市部においては、新しく入った都市住民として集住した。長崎市では、阿波踊りの連を結成するなど、阿波出身者によるコミュニティも形成されていた。

〔出身地〕

1) 船員の供給と引退後の場

当初の出漁者は大規模化し、その漁船に乗り組む船員の主要な供給地の一つとして出身地の若者が移動するという船主、船員構造の世代を超えた連続性が戦後直後までは維持されていた。

2) 資金源

出身地の社寺、自治体等に対して、船主からの多額の寄付金が寄せてくれる経済的な拠り所であった。

以上が本研究における結論部分にあたる。ただ、本研究からさらに研究展開の可能性がみえてきた。とくに、都市部へと定着していくにあたり、移住者の都市におけるコミュニティの形成や移住していった経緯についての詳細な調査研究が必要である。また、船員としていったんは移住した人でも、船員としての職を辞した後に帰郷した人は多いが、その要因や構造についての分析も必要である。本研究の成果から、次の研究展開を見据えることが可能になった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5件)

- (1) 磯本宏紀(2014):「以西底曳き網漁業における漁業移住と漁業経営の戦後の変遷 長崎市・福岡市へ移住した徳島県美波町出身の漁民」『徳島地域文化研究』12: 41-57.
- (2) 磯本宏紀(2013):「出羽島のカツオ・マグロ漁と機付帆船第壹蛭子丸の航海日誌」『徳島県立博物館研究報告』23: 33-55.
- (3) 磯本宏紀(2013):「『九州五島行き』と漁業根拠地としての玉之浦」『徳島地域文化研究』11: 88-95.
- (4) 磯本宏紀(2012):「漁民移動にともなう技術継承と技術伝播 伊島漁民による器械潜水技術を中心にして」『日本

民俗学』269:1-34.

- (5) 磯本宏紀(2011):「以西底曳網漁業における戦後の出稼ぎ 旧由岐町での聞き書き」『徳島地域文化研究』9:51-59.

〔学会発表〕(計 3件)

- (1) 磯本宏紀「出羽島のカツオ・マグロ漁と第壹蛭子丸の航海日誌」、生態人類学会研究大会、2013年3月16日、月ヶ谷温泉月の宿(徳島県)
- (2) 磯本宏紀「近代出稼ぎ漁民による以西底びき網漁業と技術移動 双方向からみる人と技術の移動」、日本民俗学会(分科会)2012年10月7日、東京学芸大学(東京都)
- (3) 磯本宏紀「潜水器漁業と瀬戸内海への伝播」、四国民具研究会、2012年6月30日、瀬戸内海歴史民俗資料館(香川県)

〔図書〕(計 1件)

- (1) 磯本宏紀(2014)『「アワ船」による漁民移動と漁業移住の類型化に関する民俗学的研究 平成22~25年度科学研究費補助金(若手研究(B))研究成果報告書』、64p、研究代表者発行

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

取得状況(計 0件)

〔その他〕

本研究による調査によって収集した資料(写真等)により、研究代表者が所属する徳島県立博物館を主催者とする、次の2つの展覧会を開催した。開催場所は、いずれも以西底曳き網漁業による漁業移住者の出身地にあたる地域である。

展覧会名:移動展「阿波の遠洋漁業」

主催:美波町日和佐図書・資料館、徳島県立博物館

会期:2012年9月6日(木)~9月30日(日)

会場:美波町日和佐図書館・資料館2階ギャラリー

展覧会名:移動展「九州・五島行き 以西底曳き網漁業」

主催:美波町教育委員会、徳島県立博物館

会期:2013年10月25日(金)~11月4日(月)

会場:美波町由岐公民館2階第1会議室

6. 研究組織

(1) 研究代表者

磯本宏紀 (ISOMOTO, Hironori)

徳島県立博物館・人文課・主任

研究者番号:50372230

(2) 研究分担者

該当なし

(3) 連携研究者

該当なし